見捨てられた万能者は、やがてどん底から成り上がる 2

A L P H A L I G H T

グリゴリ
Gurigori

アルファライト文庫

MAIN CHARACTER
登場人物紹介
ベロニカ
没落した貴族家の長女。借金を返済するため冒険者をしている。
レイア
雌のグレートキングウルフ。オークに襲われているところをクロードに助けられた。
クロード
本作の主人公。超器用貧乏なジョブ「万能者」である事を理由にパーティを追放された。
マール
魔の森で出会った強大な力を持つ女性。
ナビー
クロードの参謀役の女の子。元はレベルアップを告げるだけの概念だったが、彼に体を与えられた。
五つ子狼
レイアの子供達。性格も能力もバラバラだが、みんなお母さんが大好き。

第一章　迷宮都市ネック編2

クリエール王国最強のSランクパーティ『銀狼の牙』を追い出された元荷物持ちの少年、クロード。

しかし、追放の原因となった器用貧乏なジョブ『万能者』は、一定の動作を複数回行うとスキルや魔法を習得出来る優れたものだった。

そんなジョブを武器に、クロードはグレートキングウルフのレイアやその子供である五つ子狼達、レベルアップアナウンスにクロードが体を与えたナビーと一緒に、冒険の旅を進めていた。

冒険者ギルドから泊まっている宿の部屋へ戻ってきたクロードは、まだ夕食まで時間があったため『創造』――イメージしたスキルを作り出せる能力――でスキルを色々と作った。

「よし、今日は魔力を使いすぎたから『念話』まで作れなかったけど、仕方ないか。あ～

早くレイア達と話してみたいなあ」

クロードが半ば独り言のように呟くと、レイアが近づいてきてクロードの手をなめてから「わふ～」と首を傾げ鳴いた。

「そうだ、『付与魔法』でレイアや子供達に、個人個人の戦闘スタイルに合ったスキルをいくつか付与して戦力を強化するっていうのも良いかもしれないな。まあ、『念話』のスキルをレイア達に付与してからみんなでゆっくりと話し合えば良いかな」

クロードは直近の予定を決めて一階の食堂に夕食を食べに下りていった。

一階に下りると食堂では、近くの冒険者ギルドで働く受付嬢――ミレイが食事をしていた。いつもとは様子が違い、何やら参考書のようなものを読みながら夕食を食べている。

クロードはミレイに声をかけたが、反応はない。

そこでクロードは黙々と食事をしながら参考書らしきものを読み進めるミレイの肩をポンポンと叩き、再度声をかけた。

「おーい、ミレイ。何をそんなに熱心に読んでいるの。話しかけても反応が全然なかったから相当集中してたみたいだけど、何かあるの？」

「……あら、クロードじゃない。ええ、その通りよ。とは言ってもすぐに何かあるわけ

じゃなくてね。四年後に私にもチーフ受付嬢になれる資格が発生するから、その時のために今のうちから勉強しておこうと思って。こっちに来てからやり始めたのよ」

「なるほどなぁ……ミレイがチーフ受付嬢か。今はまだあまりピンと来ないけど、チーフ受付嬢になったミレイも見てみたいな。ん、邪魔しちゃ悪いから俺達はあっちのテーブルで食事をする事にするよ。じゃあ頑張ってね！」

クロードはミレイの座っている席と少し離れた席に着いて夕食を食べた後、部屋に戻りテントの中の魔道風呂で体にたまった疲れを取ってから眠りに就いた。

＊＊＊

翌日、クロードは少し早めに起きて食堂で朝食を食べた後、今日はどう行動するか部屋で話していた。

「ギルドで頼んでいるモンスターの解体が終わるあさってまで、依頼は受けない事にしたんだけど、みんなは何かやりたい事とかないの」

「はい、はい。私は行ってみたいところがあるんですけど」

「言ってみてよ、ナビー」

「えっとですね。この前ミレイさんが教えてくれた鉱山、あ、アービン鉱山って言うんですけど、私どうしても気になってしまって。この前ギルドでマスターの用事が終わるのを待っていた時に職員の方にアービン鉱山について聞いてみたんです。なんでもアービン鉱山では鉱石の採掘体験が出来るみたいで、それをやってみたいんですよね。掘った鉱石は持ち帰れるようなので、武器や防具を作る際に素材にすればいいんじゃないかと」

というようにナビーはそれはもう熱く、激しく語り始め、その話は十分程続いた。

「な、なるほどなぁ。でも俺は武器や防具なんて作った事もないし無理なんじゃないかな。まあ、今の話を聞いて俺も少しアービン鉱山に行ってみたくなったけどね」

「それでは、アービン鉱山に行って、なるべく珍しくて貴重な鉱石を持って帰りましょう。武器や防具を作るのは、そうですね、『創造』で『武器防具錬成』というスキルを作ってみてはどうでしょうか。そうすれば使う素材次第で凄い武器や防具が作れると思いますよ。今後の冒険のためにも優れた武器や防具は必要ですからね」

「うん。良いんじゃないかな。よし、今日はアービン鉱山に行って採掘しまくるぞ。善は急げって言うからね。早速準備をしてアービン鉱山に出かけよう」

準備を終えたクロード達は宿を出てアービン鉱山に向かった。

しばらく歩いて、ようやく見えてきたのは鉱山を囲むようにして作られた街だった。

「そうか、鉱山の周りを城壁で囲ってこの辺り一帯を鉱山の街にしているんだ。これはますますアービン鉱山に期待が持てそうだね」

「マスター、どうしてそう思ったんですか？」

ナビーが尋ねると、クロードが頷いて答える。

「それはね。わざわざ鉱山を囲んで街を作ったという事は、それだけこの鉱山から良質な鉱石が出てこの鉱山にたくさんの人が集まったって事だからだよ。そして今でも変わらず街は賑わっている。とすれば鉱脈はまだかれていない。つまり良質な鉱石がまだたくさん眠っているって事なんだ」

ナビーはさらに質問する。

「でもどうして鉱山の周りに街が出来ていたら良質な鉱石が取れるんですか」

「鉄なんかのありふれた金属だけだったら、わざわざ街なんて作る必要はないでしょ。この鉱山の近くには、そう遠くない距離にネックっていう街があるんだからそこから鉱山に通えばいい。けど、そうしないで鉱山の周りに街を作ったのは、鉱山から出てきた鉱石が普通のものだけでなく、希少な金属も出てきたからじゃないかって俺は思うんだよね」

「なるほど。なんとなくですが納得出来ました」

「よし、じゃあ鉱山に入って早いとこ採掘を始めよう」
クロードはナビー達に、自信たっぷりに根拠のない鉱山と街の考察をした後、みんなを連れて街の中へと入っていった。

鉱山の街――アービンに足を踏み入れたクロードは、そのまま真っ直ぐ鉱山の入り口へ向かっていた。
「お、思った通り鍛冶屋や武器屋、防具屋がいたるところにあるな。ねえナビー、帰りにちょっと見ていかない？　もしかしたら掘り出し物が見つかるかもしれないよ」
「そうですね。でも私やレイア、子供達のメインの装備はこれからマスターが作るものにしたいです。まあ、今回の採掘で私達の武器に使用するに値する鉱石が見つかるかわかりませんけど。さあ、早く行きましょう」

それから少ししてクロードが鉱山の入り口に着くと、そこには鉱山に入る人の行列が出来ていた。
「これは中に入るまでに一時間くらいかかりそうだね。まあ、気長に待ちますか。こういうのは焦ったりイライラしても良い事なんて一つもないからね」

「そうですね。それでは、待っている間にスキル『武器防具錬成』を作ってしまいましょう。今、『武器防具錬成』を作ってしまえば夜には消費した魔力も九割がた回復すると思いますから。寝る前に『念話』を作れると思います。どうでしょうか」
「うん。わかった。じゃあ早速『武器防具錬成』を作るよ」
「はい」
クロードは『創造』を発動し、魔力を消費してスキル『武器防具錬成』を製作した。
スキルが完成した丁度その時、クロードが鉱山に入る番がやってきた。
「お、どうやら俺達の番がそろそろ来るみたいだよ。さて、鉱山の中はどんな感じなのかワクワクしてきたね」
「はい。私もとてもワクワク、ドキドキしています。それに私、どんな鉱石が取れるかもとても楽しみなんですよ」
期待を胸に、クロード達は鉱山の中に入っていった。

鉱山の中はランタンなどによって明かりが確保され、薄暗くはあるがしっかりと辺りを確認出来るようになっていた。
「なるほどな。最低限の明かりは確保されているのか。お、あそこに案内のようなものが

あるぞ。みんな、見に行こう」

　その案内には、この体験採掘で掘る事の出来る範囲が記されていた。

「なんだ。採掘出来る範囲はそんなに広くないんだな。これはあまり希少な鉱石は取れないかもしれない。でもまあ、鉱石は鉱山だけじゃなくてダンジョンでも取れるから、この鉱山での採掘は予行演習って事で楽しくやろうか。それでなるべく良い鉱石を取って帰ろう」

「そうですね。楽しく掘っていきましょう。幸いネックの街にはダンジョンもありますからね。さあ、マスター、採掘開始ですよ」

　クロードは出来るだけ希少な鉱石を獲得するため、鉱山内で自分達が採掘可能な範囲を『マップ』に表示して、その範囲に埋まっている鉱石を『マップ』の検索機能で調べた。

　すると、表示されたほとんどが鉄鉱石や銅鉱石だったが、奥の方に一ヶ所だけミスリルが少量取れるポイントを発見した。

「ナビー、これを見てみて」

「あ、これは、非常に少ないですがミスリル鉱石ですか。でもこんな浅いところにあるなんて珍しい事もあるものですね」

「どうするナビー、このミスリル鉱石、掘って持っていく？　ここまで希少なものだと体

験で持っていくのも忍びないし、見なかった事にして他の人にゆずっちゃう？　まあ、俺としては見なかった事にしても良いかなって思ってるんだけどね」

「でしたら私も見なかった事にしましょう。それに今の私達の力ならダンジョンでも相当深いところまで潜れると思いますから、ミスリル鉱石やもっと希少な鉱石も取れると思います。ですからやはりこのミスリル鉱石は無視しましょう。その代わりにそこら辺に埋まっている鉄鉱石や銅や銀、金の鉱石を採掘しましょうか」

「そうだね」

　希少なものを求めていたにもかかわらず、結局クロードは、鉄と銅、金、銀の鉱石をそれぞれ五十個ずつ採掘するにとどめて、ネックの街に帰っていった。

　ネックの街に戻ってきたクロードは、そのまま宿の部屋に戻った。

　そして先程、待機中に作った『武器防具錬成』の効果を調べるために『鑑定』を『武器防具錬成』にかけた。

武器防具錬成　……素材があればどのような武器や防具も練成する事が出来る（ただし作れる武器や防具はスキルのレベルに依存する）。

武器：レベル1　鉄製の武器
レベル2　？？？
レベル3　？？？
レベル4　？？？
レベル5　？？？
レベル6　？？？
レベル7　？？？
レベル8　？？？
レベル9　？？？
レベル10　？？？

防具：レベル1　Fランク、Eランクのモンスターの革防具
レベル2　？？？
レベル3　？？？
レベル4　？？？
レベル5　？？？
レベル6　？？？
レベル7　？？？
レベル8　？？？
レベル9　？？？
レベル10　？？？

その他、武器や防具だけではなくスキルのレベルが5になるとアクセサリーなども作れるようになるらしいが、スキルのレベルが1のクロードにはまだ何が作れるのかわからなかった。

スキルの詳細を知ったクロードは、ナビーと今後の事について話す。

「どうやらこの『武器防具錬成』っていうスキルは、レベルを一つずつ上げていかないとレベルごとに何が作れるのかわからないみたいなんだよ。だから、『武器防具錬成』のレベルを上げるために練習しようと思うんだ。練習をするための素材を明日取りに行こうと思うんだけど……そ、その、ナビーも手伝ってくれないかな？　出来ればでいいんだけど」

「はあ～、なんですか、言いにくそうにしているから何か大事なのかと思ったら……ええ、良いですよ。全く問題ありません。それで、どのような素材を集めるんですか」
「ああ、武器の素材として金属を考えているから、『マップ』で鉱石を自由に取る事が出来る場所を探すつもりだよ。防具の素材は、街を出たところにある死の森でとりあえずFからAランクまでのモンスターの素材を集めようと思ってるんだ」
「わかりました。明日みんなで行きましょう。その素材で私も武器や防具を作ってもらうわけですし、全面的に協力しますよ。では、この話はこれで終わりにしましょう。色々話し込んでいる間にもうすぐ夕食の時間になりそうですよ。さあ、夕食を食べに一階の食堂に行きましょう」

その後、夕食を食べ終えたクロード達は、部屋に戻るとアイテムボックスからテントを出して中にある魔道風呂にみんなで入って今日の疲れを取った。
風呂を出ると、テントをアイテムボックスにしまってベッドに入る。レイアと子供達はベッドの近くで丸まり、寄り添った。
クロードは『創造』でレイア達に付与するための『念話』スキルを二つ作ってから、眠りに就いた。

＊＊＊

翌日――
早朝に目が覚めたクロードが、朝風呂に入るためにアイテムボックスからテントを取り出して風呂の準備をしていると、レイアが中に入ってきた。
お湯の入っていない浴槽を見ると、早くお湯を入れてというような顔をしてクロードを見つめてきたので、クロードは急いでお湯を張ってレイアと一緒に入る。
レイアと気持ちよく風呂に浸かってリフレッシュしていると、突然テントの中にナビーと子供達が入ってきて何やらむすっとした顔で、抗議をしてきた。
「マスター、ひどいじゃないですか。私と子供達がまだ寝ているのを良い事にレイアとだけ一緒にお風呂に入るなんて。私達をのけ者にするなんてあんまりです」
「あ、いや、ナビー違うんだ。風呂には一人で入ろうと思ってたんだけど、風呂の準備をしている時にレイアがテントの中に入ってきたからさ。どうしたのかなって思ったら早く風呂にお湯を入れてって顔で近づいてきたものだから……そのまま一緒に風呂に入って、気付いたらまったりしてました」

何故か最後は敬語になったクロードの言葉に、ナビーは渋々といった感じで頷いた。
「なるほど。今回の事はわかりました。ですが今度からこのように朝風呂に入ろうと思った時は私達も誘ってください。まだ寝ていたら起こしても構いませんからね。私達もマスターと一緒にお風呂に入りたいんですから。ちゃんと覚えておいてください。約束ですよ。それとレイア、抜け駆けは厳禁ですからね」
ナビーに釘を刺されたレイアは風呂の中で耳をたらしうなだれていた。
その後、クロードはみんなでお風呂に入り直して、一階の食堂で朝食を食べた。
朝の八時三十分過ぎに宿を出て『武器防具錬成』の練習のための素材を取りに死の森へと足を向けた。

死の森に着いたクロードは森の入り口で立ち止まると『マップ』を発動して、まずは森の中にある鉱床を探す事にした。
「鉱床を探すわけだけど、たぶんそういうのは森の奥に行かないとないと思うんだよね。実際に『マップ』に表示されている範囲には鉱床はないみたいだし。だから死の森の中層の入り口まで行ってみようと思うんだ。みんなもそれで良いかな」
「はい。問題ないですよ。中層まで行く間に出会ったモンスターは出来る限り倒してアイテムボックスにストックしておきましょう」
「うん。その方針で行こう」

中層近くまでやってきたクロードは、また『マップ』を発動して鉱床を探し始めた。
ここまでに倒したモンスターは、ゴブリン百体、ホブゴブリン百五十体、リザードマン五十体、ハイオーク百体、ブラックスパイダー、ミミックそれぞれ三十体。
多種にわたるモンスターを数え切れない程討伐していた。
しばらくの間『マップ』で鉱床を探していると――
「お、やっぱりこの辺まで来ると少しずつではあるけど、ほとんどが鉄鉱床だな。よし、ここら辺にある鉄鉱床を掘り出してから奥に進もう」
中層の入り口付近にあった五つの鉄鉱床を掘り終えた後、クロードはさらに奥へと進んでいった。

中層ももうすぐ半ばというところまで来た時、ついに鉄だけでなく銀や金、ミスリル、そして少量ではあるがアダマンタイトの鉱床を発見した。
「お、この辺りには鉄じゃない鉱石の鉱床もふんだんにあるし、それに少ないけどアダマ

ンタイトの鉱床もあるじゃないか。よし、今回の鉱石探しはこの辺で終わりにして、今度はC、Bランクのモンスターを積極的に倒して素材を集めよう。まだ太陽の位置からして正午を少し過ぎたくらいだと思うから、あと五時間くらいはモンスターを討伐出来る」

中層を探索し始めてから数分経った時、『マップ』にCランクのモンスターが十体程の群れで行動しているのが表示された。

「よし、早速『マップ』に群れが引っかかったよ。倒しに行こうか」

「マスター、それにしても『マップ』の有効範囲が千メートルだと歩き回りながらモンスターを探さなければなりませんから、少し不便ですよね」

「それは仕方ないよ、ナビー。全方位を表示させる『マップ』を作ろうとしたけど出来なかったんだから。『マップ』もレベル7になってやっと有効範囲が千メートルだし、それにこの『マップ』のおかげで奇襲や挟み撃ちは俺にはきかないからね。とても助かってるよ」

「はい。『マップ』はとても便利で役に立ちます。しかしマスター、全方位を表示させる『マップ』は作れなかったのではありません。全方位『マップ』は、『マップ』を進化させる事でしか手に入れる事が出来ないのです」

「え、ええ⁉　そうだったの？　じゃあなんで『マップ』を作った時にその事を教えてくれなかったの」

「そ、それは……その、す」

「す……？」

言葉に詰まった様子のナビーを不思議に思い、クロードは首を傾げた。

「すみませんでした。教えるのをうっかり忘れていました」

「え～、ま、まあ、良いけどさ。今度からは気を付けてね」

「は、はい。わかりました。マスター」

クロード達は、そんなどうでもいいやり取りをしながら『マップ』に表示されたCランクモンスターの群れに向かっていった。

数分かけてCランクモンスターの群れが目視出来るところまで到達すると、それらはブラックウルフの群れだとわかった。

「表示されていたのはブラックウルフだったか……ウルフ系のモンスターは肉があまり美味しくないけど、それ以外は全て武器や防具の素材になるから、特に中堅CランクからBランクの冒険者には人気があるんだよね。それにレイア達とは完璧な別種族だから倒すのにそれ程迷わなくて済むし、俺としてもありがたい。それじゃあ、ブラックウルフには俺

の『武器防具錬成』の練習台になってもらおうかな」
クロードは隠れて覗いていた茂みからブラックウルフの群れの前に出る。
お互いが戦闘態勢に入った。
最初にしかけたのはブラックウルフの群れで、クロードは武器を構えたままブラックウルフ達を迎え撃つ形になった。
「みんな、なるべくで良いから素材を傷付けないようにしてブラックウルフを倒してね。でも絶対じゃないから、危ないと思ったらそんな事考えないで倒しちゃって良いよ」
「はい。わかりました。でもそのような縛りがあった方が戦闘にメリハリが付いて良い訓練になると思いますよ。まあ、無理はしませんけどね」
そう言いながらクロードとナビー、五つ子のうちの一匹ハロが土魔法でブラックウルフ達の足を止めた。
レイアと残りの四匹ボロ、イリア、レイ、リサがブラックウルフ達の首に噛みついたり引っかいたりしながら攻撃して、徐々に群れを倒していった。

開始から数分後、最後の一体を倒して戦闘は終わりを迎えた。
「よし、これが最後のブラックウルフだね。みんな、体もよく動いてたし連携も取れてた

ね。今回の戦闘で課した、なるべく素材を傷付けないという条件も無事にクリア出来てたし、みんな本当に強くなったよ。それじゃあ、倒したブラックウルフをアイテムボックスにしまって、次のモンスターのところに向かおうか」
ブラックウルフ十体の死体をアイテムボックスにしまい終わったクロードは、また『マップ』を発動して次のモンスターを求めて森の中を探索し始めた。

それから十分程モンスターを探していると『マップ』の端にBランクのモンスターの反応が現れた。
「お、次はBランクのモンスターか。いったいどんなモンスターなんだろう。とりあえず確認しに行こうか。みんな、行くよ」
「はい。Bランクのモンスターですか。なんだか腕が鳴りますね」
「「「「「わふふ、わふ」」」」」
そして、今回も目視出来るところまで来て茂みに隠れながら見てみると、そのモンスターは、ドラゴニュートだった。
「げ、ドラゴニュートかぁ。あのモンスターは知能が高い事でも知られている限りなくAランクに近いモンスターなんだよ。みんな、どうする？　今ならまだ引き返せる……」

クロードはそう言いかけたところで言葉を止めた。

「……と思ったけど、どうやらもう引き返すのは無理みたいだね。ドラゴニュートがしっかりこっちを見てるよ。ここにいるのがバレバレだな。戦うしかないかな。みんな、戦闘準備して！　来るよ」

戦闘態勢へと入った瞬間、ドラゴニュートがもの凄い速さでこちらに接近してきた。

クロード達はドラゴニュートの強烈な突進を回避して、距離を一定以上取りつつドラゴニュートを囲むような陣形をとった。

「みんな、各自カバーし合いながら確実にドラゴニュートの体力を削っていこう」

「はい。わかりました」

「「「「「わふ」」」」」

ナビー、レイア、五つ子達の返事を聞いたクロードは、早口で作戦を告げる。

「まず、ナビーと子供達は俺とレイアのサポートに回ってくれ。今回の相手のドラゴニュートは、今まで相手にしてきたモンスターとは明らかにレベルが違う。みんなに何かあったら俺は耐えられそうにないからね」

「っ⁉　わ、わかりました」

ナビーは最後の言葉に驚いたように返事をする。

彼女のそんな様子は気にせず、クロードとレイアはナビーと子供達にドラゴニュートを攪乱してもらいつつ、刃を交えた。

「このドラゴニュートは中々しぶといな。レイア、奴を左右から挟み込んで強烈な一撃を叩き込むよ」

「わふ！」

クロードとレイアは、ナビーと子供達の牽制によって集中力を切らしているドラゴニュートの隙をついて左右から挟み込んだ。

クロードは上級剣術スキルの技である『双牙煉獄斬』を、レイアは自分の牙に風の魔力を纏わせて『風爪牙』をそれぞれドラゴニュートに叩き込んだ。

そして、戦闘開始から十分経った頃、流石のドラゴニュートも一対多の不利な状況を覆す事は出来ず、クロード達によって倒された。

「ふう、ドラゴニュート一体倒すのに結構時間がかかってしまったね。さっさと素材をアイテムボックスにしまって次のモンスターを探そう」

その後、多数のCランクとBランクのモンスターを倒したクロードが、ネックの街にそろそろ戻ろうとしていた時、遠くの方から女性の叫び声が聞こえてきた。

クロードは、『マップ』を表示しながら女性の叫び声が聞こえたと思われる方へ急いで向かっていく。

道中、『マップ』の端にCランクモンスターの光点が現れたかと思えば、CランクモンスターやBランクモンスターの光点が『マップ』上に次々に出現。最後にAランクモンスターの光点が一つ現れた。

「ナビー、なんかもの凄くやばそうなモンスターの群れを発見したけど、肝心の叫び声の人が表示されないんだ。一体どうなってるんだ」

「マスター、『マップ』は今モンスターのみ表示されるように設定していますから、人が表示されないのは当然です。早く初期設定に戻してください」

「ああ、わ、わかった」

ナビーの言う通りに『マップ』を初期設定に戻してもう一度確認してみると、モンスターの大群の中に一つだけ別の光点を発見する事が出来た。

「この光点がさっきの叫び声の主かもしれないな。とりあえずここに向かおう。『マップ』を見た限り明らかにモンスターの群れに追われている」

「はい」

「「「「「わふっ」」」」」

『マップ』に表示された場所に急いで向かい、到着したクロード達。

様子を見てみると、体中傷だらけの人間の女性がオーガの群れの追撃を必死に避けながら逃げている光景があった。

「そうか、CランクモンスターがオーガでBランクモンスターがハイオーガ、そして、あの一番後ろにいるのがAランクモンスターのオーガナイトだったのか」

クロードの呟きに、ナビーが頷く。

「あのメンツだと偵察部隊の可能性が一番高いですね。たぶんこの近くのどこかにオーガ達の集落か何かがあるはずです。そこにはもっと上のランクの化け物達がうじゃうじゃいるはずですから、そいつらに報告される前に彼女を救出しないとですね」

「なるほどな。確かにそんな上のランクの化け物達に報告されると、あとが面倒くさいな。奴らを倒して彼女を救出したら、速攻でネックの街まで戻ろう」

「そうですね。では、殲滅しに行きましょう」

「「「「「わふふ」」」」」

クロード達は、襲われている女性を救出するため、オーガの群れに向かって攻撃をしかけていった。

最初の攻撃を群れの最前列にいたオーガ達に浴びせている間に、女性が逃げてくれれば良かったのだが、女性は傷だらけで、ろくに体を動かす事が出来ない状態らしい。

クロードはリサに指示して彼女を後方に下がらせ、彼女の周りに結界魔法で結界を展開して安全を確保。

続けてリサに前線に戻るように指示した。

みんなで最前線にいるオーガ約二十体の首を集中的に攻撃し、バッタバッタと倒していく。そのうち、残りはハイオーガ十体とオーガナイト一体となった。

その時、オーガナイトが何やら指示を出す。

すると、ハイオーガ達がオーガナイトを中心に陣形を変えていき、何か大きい矢印のような陣を形成した。

「なんだあの陣形は……？　攻撃特化型の陣形か何かか？　ん、矢印の傘の部分が開き始めてTの字っぽくなってきたぞ」

「あ、また形を変えました。どうやら変形はこれで終わりのようですね。最終的な形はピラミッド型のようです」

「ああ、あいつらは俺達をあの陣形で押しつぶそうとしているみたいだね。どういう意味があるのかはわからないが……まあ、そう上手くはいかないよ」

そして、この戦闘の第二ラウンドが始まった。

ピラミッド型の陣形を形成してきたオーガナイト達と睨み合う形となったクロード達は、どう攻めるべきか迷っていた。

「ん～。リーダーのオーガナイトを倒すには、その前に陣取っているハイオーガ達をなんとかしないといけないんだけど……よし！　ちょっと子供達とナビーにとっては厳しい戦いになるかもしれないが、訓練も兼ねてやってみるか。ハイオーガ達を俺が六体、レイアが三体、ナビーと子供達が一体倒す事にしよう。その間、オーガナイトには俺の張る結界の中で大人しくしていてもらおう。あ、そうだ『鑑定』してあいつらの強さも調べておくかな」

クロードはそう言うと、早速結界魔法を放ちオーガナイトを結界の中に閉じ込める。その後、ハイオーガ十体とオーガナイトに『鑑定』を使った。

【名　前】

【種　族】ハイオーガ

【称　号】Bランクモンスター

【レベル】（25／100）

【能力値】

体　力　７５００　魔　力　４１５０
攻撃力　８２６０　防御力　８９１０
魔　攻　３１２０　魔　防　３７４０
素早さ　３３１０　器用さ　２９２０
魅力（みりょく）　１００（オーガ相手の場合３０００）

【名　前】

【種　族】オーガナイト

【称　号】Ａランクモンスター

【レベル】（１０／１００）

【能力値】

体　力　１４０００　魔　力　８９５０
攻撃力　１９９５０　防御力　２０５００
魔　攻　９５００　魔　防　９８５０
素早さ　７９００　器用さ　８８００

魅　力　２５０（オーガ相手の場合７０００）

「結界があるから、ハイオーガとの戦闘中にオーガナイトに邪魔される心配はなくなった。それにしても、どいつもこいつも子供達には少しきついかもな……でも、気を緩（ゆる）めたりしなければ問題なく立ち回れるだろう」

そこまで確認したクロードは、ナビー達に告げる。

「俺の結界でオーガナイトを閉じ込めておける時間は十五分が限界だ。ハイオーガを倒すのにあまり時間をかけないようにね。頼むよ」

まず、動き出したのはレイアだった。

レイアは、自分が担当するハイオーガ三体にそれぞれ体当たりして、陣から離れた場所に吹っ飛ばした。

自分が自由に動ける狩場（かりば）を作り出して、ハイオーガ三体を自慢のスピードで翻弄（ほんろう）し始めた。

ナビーと子供達は、ナビーが支援（しえん）補助魔法で子供達の全ステータスを底上げした後、自身も強化し、魔法を使えるナビーとイリア、レイ、ハロでハイオーガを妨害（ぼうがい）する。

ハイオーガに隙が生じるとボロとリサが攻撃をしかけるといった戦い方で、少しずつハイオーガの体力を削っていった。

クロードはハイオーガ六体を引きつけて、レイアと同じように陣の中心から少し離れた場所でお互いに睨み合っていた。

剣を構えたクロードは、六体いるハイオーガのうちの一体に切りかかる。

すると、そのハイオーガを守るためなのか、他のハイオーガが前に出てきてクロードが切りかかったハイオーガを庇う。

ハイオーガ達の行動に驚いて、クロードの剣の軌道が狂った。

「し、しまった。ずれたか……もっとスピードを上げて奴らに防御する隙を与えないようにしないとな」

クロードは『支援補助魔法（極）』で自分に『速度上昇（極）』をかけて、移動速度を今までの約三倍にしてから、もう一度ハイオーガ達に切りかかっていった。

今度はクロードのスピードについていけず、ハイオーガ達は首筋を剣で切られて倒れていく。

いつの間にか、残りのハイオーガは二体となっていた。

一方その頃、ナビーと子供達は、ハイオーガ一体を相手に善戦していた。

「レイ、ハイオーガの顔めがけて『ファイアボール』を何発か撃ち込んでもらえる？　ハイオーガの目をつぶして、みんなで切り込みましょう」

「わふ～」

ナビーの合図で、レイがハイオーガの顔めがけて『ファイアボール』を十発撃ち込んだ。

ハイオーガの目がくらんでいる隙にナビーと子供達は、体のあちこちを切り刻み、引き裂いてハイオーガを絶命させた。

レイアはハイオーガ三体を相手に中級風魔法の『ウィンドストーム』を発動した。三体のハイオーガを怯ませて、スキル『光速』で一瞬でそのうちの一体に近づく。

首筋を切り裂き絶命させると、まだ動く事が出来ず横並びに突っ立っている残り二体のハイオーガに接近。

両前脚にマグマのような真っ赤な魔力を纏わせて、二体のハイオーガを引き裂いた。

クロードも残り二体となったハイオーガの体力を確実に削っていた。

「お、みんな、もう終わったみたいだな。じゃあ、俺もそろそろ終わらせようかな」
クロードはハイオーガをわざとあおるような事を言いながら、自分の数メートル前方に下級雷魔法の『エレキトラップ』をしかけた。
ハイオーガ二体は人間の言葉の意味を理解する事が出来るのか、雄叫びを上げながら突っ込んできた。
「その突進は俺にとってはありがたい行動なんだけどね。君達はそこまで頭が良くないみたいだから、そんな事はわからないかな」
今のクロードの言葉でますます怒ったハイオーガ達は、血走った目を彼に向けながらそのまま駆けてきた。
しかし、クロードがしかけていた『エレキトラップ』に見事引っかかり数秒ではあるが痺れて動けなくなってしまう。
クロードはその隙を見逃さずに、身動きが取れなくなっている二体のハイオーガに素早く近づき中級剣術『疾風切り』で首を中心に切り刻んで倒した。
「はあ～、このハイオーガの知能がそこまで高くなくてよかった。もし、少しでも考える力があればあのトラップには引っかからなかったかもしれないからな」
そう呟きながら、仲間のもとへ向かった。

クロードがオーガナイトを結界で閉じ込めている場所へ戻ってくると、ナビーと子供達、レイアは既に集まっていた。
「みんな、早いな。やっぱり実力が上がってきているね……さてと、あとは、あそこの結界の中で暴れているオーガナイトだけだけど、もうすぐ結界が壊れそうだね」
オーガナイトを覆っている結界を見てみると盛大に揺らいでいた。
「あと一分もつかってところかな。みんな、今のうちにヒールポーションとマナポーションを飲んで体力と魔力を回復しておいて。万全の状態で奴を迎え撃とう」
そう言ってアイテムボックスからヒールポーションとマナポーションを取り出した。
クロードとナビーが飲んだあと、手分けしてレイアと子供達にも飲ませて、体力を回復させ、オーガナイトとの戦闘に備えた。
その直後、オーガナイトはクロードの張った結界を破壊して外に出てきた。
「とうとう出てきたか。こいつは中々強いよ。まだレベル10なのに既にステータスが結構高かったし、油断していると簡単に足をすくわれかねない。みんな、十分に注意してオーガナイトの対応にあたってね」
クロード達が戦闘態勢に入ると、オーガナイトもどでかい剣と盾を構えてゆっくりと前

進してきた。

「ナビーと子供達はオーガナイトの左右から攻撃をしかけて。俺とレイアはオーガナイトの前後から挟み撃ちだ」

「はい」

「「「「「わふ」」」」」

クロード達はオーガナイトを前後左右から挟み込むような位置にそれぞれつくと、一斉に攻撃をしかけていった。

向こうの攻撃に当たらないように素早く動いて回避しながら、オーガナイトに攻撃を当てていき、少しずつダメージを与えていく。

やがてオーガナイトはクロード達の攻撃に耐える事が出来なくなり、膝を地につけた。

「よし、今がチャンスだ。一気にたたみかけるよ」

クロードがみんなにそう言ってオーガナイトに総攻撃をしかけようとした時――

オーガナイトがいきなり雄叫びを上げて立ち上がり、その体の表面に赤いもやのようなものが浮かび始めた。

「な、なんだ!? 急にオーガナイトから感じられるオーラが膨れ上がったような気がするんだけど、どうなっているんだ……」

クロードが急いでオーガナイトを鑑定してみると、ステータスの攻撃力と魔攻が一・五倍に上がっていた。

【名　前】

【種　族】オーガナイト

【称　号】Ａランクモンスター

【レベル】（１０／１００）

【能力値】

体　力　１２００／１４０００　魔　力　８９５０

攻撃力　２９９２５　防御力　２０５００

魔　攻　１４２５０　魔　防　９８５０

素早さ　７９００　器用さ　８８００

魅　力　２５０（オーガ相手の場合７０００）

【ユニークスキル】

不屈（１／１０）

「みんな、あいつの攻撃をまともに受けるんじゃないぞ。当たったら最後、即死するレベルまで攻撃力が爆上がりしてるからね」

クロード達は今度こそオーガナイトをしとめるために、一斉に自身の大技をオーガナイト目がけて放った。

オーガナイトは、ナビーの放った中級剣術『陽炎』とボロとリサがこの戦いで新しく覚えた『双爪』を大盾と大剣でなんとか防いだ。

だが、クロードの上級剣術『雷光一閃』とレイアの『獄炎爪』、そしてイリア、レイ、ハロが放った『火爪』『風爪』『土爪』は防ぐ事が出来ず盛大に散っていった。

その後、クロードは後方で結界を張って待機してもらっていた女性のもとへ行き結界を解くと、ヒールポーションを渡して体力を回復させた。

「あ、あの、助けてくれてありがとう。あ、あたいはベロニカって言うんだ、よろしくな」

「俺はクロードって言います。こっちの子がナビーで、こっちのグレートキングウルフとグレートウルフは俺の従魔でレイア、ボロ、イリア、レイ、ハロ、リサって言います。一応ヒールポーションは飲んでもらいましたけど、体の調子とかはどうですか」

「う、うん。問題ないみたいだ」

ベロニカは自身の赤い髪と同じくらいに頬を赤くしながら自分の体を調べて、問題ない事を確認していた。

「そうですか。では、もう時間も遅くなってしまっているので、急いで街まで戻りましょう。急げば閉門の時間に間に合うかもしれませんからね」

急ぎ足で街まで戻ったクロード達とベロニカは、ぎりぎり閉門時間に間に合って中に入る事が出来たのだった。

城門前でベロニカと別れたクロードは宿で夕食を食べると部屋に戻り、今日の分の『念話』スキルを作って眠りに就いた。

＊＊＊

次の日――

ナビーとレイア、子供達はネックの街を散策に行き、クロードは宿の部屋にこもり残り二つの『念話』スキルを作った。

立ち読みサンプル
はここまで

その後、ユニークスキル『全属性魔法』の空間魔法で亜空間を作り、そこで『武器防具錬成』の練習をもくもくとこなした。

そして、夜。

クロードは夕食を食べ終えて部屋に戻ると、告げる。

「みんな、ついに全員分の『念話』スキルが完成したよ。今からレイアと子供達に順番に付与していくからね」

そう言ってクロードはレイアと子供達に『念話』のスキルを付与していった。

レイアとその子供達は、とても嬉しそうに付与してもらったばかりの『念話』でたどたどしく話す。

『あ、り、が、と、う』

『『『『う、れ、し、い』』』』』

それに対してクロードは、レイアと子供達を力いっぱい抱きしめた。

ナビーはその光景を見ながら瞳に涙をためていた。